親鸞聖人からのお手紙

第一通のおこころ

司教 佐々木 義英

法語としてのお手紙

『親鸞聖人御消息』の第一通（註釈版聖典735ページ）として収められている親鸞聖人のお手紙は、顕智上人をはじめお弟子方が書き写された「古写消息」（『浄土真宗聖典全書』二・768ページ）、第三代宗主の覚如上人の次男である従覚上人の編集にかかる『末灯鈔』（同二・777ページ）に綴られていたものです。

また、お手紙の終わりには「建長三歳辛亥閏九月二十日　愚禿親鸞七十九歳」（註釈版聖典737ページ）とあり、現存しているお手紙の中で、差し出された元号と日付が記されたものとして、もっとも古いものです。

第一通は、関東にいらっしゃるお弟子から寄せられた質問にお応えになったお手紙であるとみられていますが、対応する質問状が現存していません。しかしながら、その趣旨は「浄土真宗は大乗のなかの至極なり（この浄土真宗こそ大乗の中の究極の教えです）」（同）と示されていること、本文の終わりに「南無阿弥陀仏」とあり、宛名が記されていないことなどから、阿弥陀仏の本願のおこころをすべての方々に知らせるための法語というかたちをとられているとみることができます。

お手紙の構成

お手紙の構成について窺ってみますと、はじめに「有念無念の事」（同735ページ）という標題があります。ただ、この標題は後世の付加であると考えられています。そして、『註釈版聖典』では、本文を六段に分けています（図❶）。

第一段は「来迎は諸行往生にあり」（同735ページ）から「来迎の儀則をまたず」まで。第二段は「正念といふは、本弘誓願の信楽定まるをいふなり」から「これすなはち他力のなかの他力なり」まで。第三段は「また

図❶　第一通の段落

［第一段］来迎は諸行往生にあり～来迎の儀則をまたず。
［第二段］正念といふは～これすなはち他力のなかの他力なり。
［第三段］また正念といふにつきて～この定心・散心の行者のいふことなり。
［第四段］選択本願は有念にあらず～ゆゑに権といふなり。
［第五段］浄土宗にまた有念あり～よくよくとふべし。
［第六段］浄土宗のなかに真あり～『華厳経』にみえたり。

正念といふにつきて二つあり」から「この定心・散心の行者のいふことなり」（同736ページ）まで。第四段は「選択本願は有念にあらず、無念にあらず」から「かりにさまざまの形をあらはしてすすめたまふがゆゑに権といふなり」（同737ページ）まで。第五段は「浄土宗にまた有念あり、無念あり」から「またこの聖道の無念のなかにまた有念あり。よくよくとふべし」まで。そして、第六段は「浄土宗のなかに真あり、仮あり」から「『華厳経』にみえたり」までとなっています。

第一通を拝読するにあたっては、その内容を鑑みて、「臨終の来迎」に関する第一段、「正念」に関する第二段と第三段、「有念」「無念」の意味について、「聖道の教え」に立って解釈を示される第四段から「浄土の教え」に立って解釈を示される第五段まで、そして、結びの第六段の四つに分けて拝読してみようと思います（図❷）。

お手紙の概要

お手紙の概要について窺ってみますと、第一段の内容は、「臨終の来迎」の要・不要についての応答です（図❷-①）。臨終の来迎とは「さまざまな行を修めて往生を願うものの臨終に際し、阿弥陀仏が菩薩方とともに迎えに来る」という意味で、「臨終を待って往生のための来迎を頼りにする必要があるか否か」という問いに対して応えられたものです。

そして、「他力の信心（真実の信心）」を得るものは、すでに往生することが定まっているので、臨終の来迎を頼りにする必要はないと説かれています。

第二段と第三段の内容は、「正念」（図❷-②）という言葉に「他力の信心」（図❷-③）という意と「自力の信」（図❷-④）という意があると示し、さらに「自力の信」には「定心」「散心」の二つの意があると示されています。

このうち、「定心」とは「心を乱さず思いを一つに集中し、浄土のすがたを観ずるもの」（図❷-⑤）、「散心」とは「悪い行いをやめ、あれこれと善い行いをするものの心」（図❷-⑥）という意味で、どちらも「自力

図❷　第一通の構成

- 第一段 ― ①来迎の釈
- 第二段 ― ②正念の釈
- 第三段 ― ③他力の意
- 第三段 ― ④自力の意（⑤定心・⑥散心）
- 第四段 ― ⑦有念・無念の釈（自力の意）
- 第五段 ― ⑧聖道の教え
- 第五段 ― ⑨浄土の教え（⑩散善・⑪定善）
- 第六段 ― ⑫真（真実）・仮（方便）の判
- 第六段 ― ⑬釈尊の善知識の釈

を頼りとして阿弥陀仏の浄土に往生しようとするものの心である」と示されています。

そして、臨終の来迎を頼りにする必要があるものは、それらの「自力の信（定心・散心）」にとらわれているものであると説かれています。

第四段の内容は、「選択本願（第十八願）」の教えは、「有念」「無念」ということを説いているのではないと示されています（図❷-⑦）。その「有念」「無念」には、「自力でさとりを開くという聖道の教え」の中で説かれるときの意と、「自力で往生するという浄土の教え」の中で説かれるときの意があるといわれます。

このうち、「自力でさとりを開くという聖道の教え」（図❷-⑧）では、「有念」は「さとりの世界の色や形を観想すること」、「無念」は「色や形を離れてさとりと一体となること」を表すと示されています。

第五段の内容は、前段を承けるかたちで「自力で往生するという浄土の教え」（図❷-⑨）では、「有念」は「悪い行いをやめ、あれこれと善い行いをする」という「散善」（図❷-⑩）、「無念」は「心を乱さず思いを一つに集中し、浄土のすがたを観ずる」という「定善」（図❷-⑪）を表すと示されています。

そして、結びの第六段では、それまでの「有念」「無念」の教えは「方便の教え」であると断じ、「他力の信心を恵み与えて往生・成仏させるという選択本願が、仏教の中でもっともすぐれた真実の教えである」と判じられているのです（図❷-⑫）。

なお、第六段の終わりに「釈迦如来の御善知識は一百一十人なり。『華厳経』にみえたり」（同737ページ）とある一文は、釈尊の師の有無について応えられたもので、「それは百十人であると『華厳経』に説かれている」とのみ示して、筆をおかれています（図❷-⑬）。

したがって、この一文はそれまでの脈絡から外れ、にわかに書き足されているように感じられます。しかしながら、第一通を「関東のお弟子から寄せられた質問に対するお手紙である」という観点から拝読するとき、そのひとつの問いに応答していらっしゃるとみることができます。

第一通としての風格

第一通は、臨終の来迎の要・不要についての応答に端を発し、「有念」「無念」という言葉を巧みに用いながら、それは自力にとらわれているものの所説であると示し、また、その心を頼りとする「聖道の教え」と「浄土の教え」のあることを示して、それらは「方便の教え」であると断じられています。そして、「他力の信心を恵み与えて往生・成仏させるという選択本願」が、「真実の教え」すなわち「浄土真宗」であると結論づけられているのです。

このように「すべての仏教を分類し判別して、自らの依りどころとなる真実の教えを明らかにする」という教相判釈は、『親鸞聖人御消息』の第一通としてふさわしい位置をしめるものであるといえるでしょう。